



ごあいさつ

取組代表者

桐野 豊 (徳島文理大学学長)

平成 24 年度文部科学省「大学間連携共同教育推進事業」として、四国のすべての薬学部（徳島文理大学薬学部と香川薬学部、徳島大学薬学部、松山大学薬学部の 3 大学 4 薬学部）による取り組み「四国の全薬学部の連携・共同による薬学教育改革」も第 3 年度に入りました。本取り組みは、四国の全薬学部と地域のステークホルダーが密接に情報交換を行い、課題発見能力と高度な問題解決能力を有する薬学系医療人・研究者の養成のための学士課程・大学院教育の質保証と、四国特有の地域課題解決策を目指すものであります。

昨年度中に遠隔講義システムが全薬学部に導入されました。その構成や仕組みにつきましては、本ニュースレター (p. 17) に土屋浩一郎教授（徳島大学）の解説があります。今年度は、この遠隔授業システムによる各大学のリソースを活用したアドバンスト・カリキュラムの充実に取り組んで参ります。これにより、約 3,300 人の四国の薬学生・大学院生がその恩恵を受けることとなります。

事業推進委員会

徳島文理大学薬学部



学部長
福山愛保

専門分野は生物有機化学です。変性神経細胞の修復と神経細胞死を阻止する薬物の研究に没頭しています。何かに興味を持ち、知的刺激を受け、自分で探求し、実験を試み、資料を調べ、自分なりの発見をして、そして結論を出す。このような学問の魅力を学生と共有できる教育・研究を目指したい。また、学部長として、Think globally, act locally、常に「世界はどうなるのか」とかいった広い視野・視点を持ち、行動は地道に身近なところからやっていきます。



教授
京谷庄二郎

臨床薬剤師としての経験が長い私自身にとって、医療現場が求める薬剤師と教育現場での薬学教育との間には、大きなギャップを感じます。特に医療現場では、「問題解決能力をもった」薬剤師が求められています。この四国の全薬学部の連携・共同による薬学改革では、基礎研究を基に医療現場で求められる「問題解決能力をもった」薬剤師の養成を行いたいと考えています。

徳島文理大学香川薬学部



学部長
宮澤 宏

専門は分子生物学で、DNA 複製・修復や幹細胞から神経細胞への分化メカニズムの解明をめざした研究を行っています。先般改訂になったモデルコアカリキュラムの内容から、薬学部教育が養成する薬剤師が多彩な能力を求められていることが窺えます。本事業の推進によって、知識や技能の修得に偏りがちな従来の薬学教育から、多彩な能力を備え社会のニーズに応えられる薬剤師を輩出する教育へ転換させるべく努めていきたいと考えています。よろしく申し上げます。



教授
飯原なおみ

徳島文理大学香川薬学部の飯原なおみでございます。医療のあり方や医薬品開発のあり方は、さまざまな社会的課題を受けて急速に変わろうとしています。この変革期に果敢に挑む薬剤師を輩出するには、感性や探究心とともに、医療や社会の課題を科学的に思考し新知見を見出す力、新たな形態を創出し提案する力を身につける必要があります。このような期待する薬剤師を養成できるように、皆様のご支援を賜りながら本事業を実りあるものにしていくたく存じます。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

各薬学部がすでに取り組んでいる実践教育の例を本ニュースレターではいくつか取り上げています。へき地医療、災害時対応薬剤師、医療情報のIT化、生涯教育などに関する情報共有を通じて、優れた実践活動を四国の全域に広めていくように努めたいと思います。

四薬学部合同教務委員会と分野別 Faculty Development 活動により、平成 27 年度から実施予定の改訂薬学教育モデルコアカリキュラムに対応した薬学教育を確実に実施して参ります。さらに、国内外の先進薬学教育の視察による薬学教育のさらなる高度化を図り、また、海外先進拠点薬学部との連携による若手教員及び大学院生の海外研修を通じた薬学教育のグローバル化に対応いたします。また、3 大学の連携による pharmacist-scientist 養成大学院教育を推進致します。特に、社会人大学院生の受け入れ体制を整備し、現役薬剤師を対象とするより高度な教育のための大学院教育を推進します。

高大連携活動は、各薬学部が地域の高校との間でそれぞれに推進しておりますが、毎年秋に開催される「薬学会・薬剤師会・病院薬剤師会の合同中国四国支部学術大会」における「高校生オープン学会」は本取り組みが中心になって実施しているユニークな高大連携イベントです。高校生オープン学会は、平成 24 年度高松大会から始まり、平成 25 年度松山大会では、本ニュースレター (p. 28) に紹介されている通り、活況を呈し、好評を得ました。平成 26 年度の中国四国支部大会 (広島) でもぜひ実施したいと考えています。

本取り組みを通じて、学生は薬剤師に対する社会の要請・期待を強く意識するようになり、大学で学んだ知識を如何に地域・社会に役立てることが出来るかを主体的に考え、行動できるようになるものと期待しています。

平成 26 年 7 月

徳島大学薬学部



学部長
大高 章

平成 25 年 4 月から徳島大学薬学部長を務めさせていただいております。四国の全薬学部の連携・共同による薬学教育改革事業に参加している唯一の国立大学としての役割を果たしたいと考えています。それは、Pharmacist-Scientist の育成を基盤とし、基礎から臨床そして臨床から基礎へのサイエンス情報の橋渡しが可能なる人材を輩出したいと考えております。私学薬学部の皆さんも、本学大学院への進学を通じて、Pharmacist-Scientist への道を目指してみるのも如何でしょうか。



教授
土屋 浩一郎

このたび、「四国の全薬学部の連携・共同による薬学教育改革」推進委員会に徳島大学から参加いたします土屋と申します。さて、このたびの事業では四国の 3 大学・4 薬学部がそれぞれの強みを生かしつつ、共同で社会の求める薬剤師の養成を目指していますが、徳島大学薬学部では伝統の創薬の強みを生かし、研究マインドを持った臨床薬剤師の養成に寄与していきたいと考えています。これからも本事業に対するご支援とご鞭撻をよろしくお願い致します。

松山大学薬学部



学部長
古川 美子

今年度から本事業の推進委員を務めることになりました松山大学薬学部長の古川美子です。本学は今春、大学院医療薬学研究科 (4 年制博士課程) を設置しました。本事業には、これまで学士課程のみの参加でしたが、大学院課程における教育・研究についても参加させていただけるようになりました。本連携事業を通じて四国全薬学部の力を結集し、四国に根ざした薬学系医療人を養成していきたいと考えています。よろしくお願い致します。



教授
松岡 一郎

私の専門分野は神経科学なので普段は、神経細胞やシナプスの働き、さらには精神・神経疾患の発症機構といったことを考えています。一方、薬剤師の職域が広がり、薬剤師が今以上に患者や市民から信頼される存在になるためには、薬の適正使用を重視することが必要と考えています。そのような思いから最近、松大の先生方と『パワフル・メディスン』という本を翻訳しました。本連携事業では、各薬学部と地域のステークホルダーが協働して新時代の薬剤師育成の枠組みを創造できると期待しています。

ステークホルダーからのメッセージ

一般社団法人愛媛県薬剤師会 会長 宮内 芳郎



一般社団法人愛媛県薬剤師会 会長
宮内 芳郎

四国の全薬学部連携・共同による薬学教育改革事業が平成24年度より開始され、今年度で3年目となります。

近年の社会情勢の変化により、薬剤師の職務や薬剤師に求められる社会的役割は大きく変わってきています。超少子高齢化社会を迎えて医療、介護、福祉などの社会保障体制への対応が重要となり、薬剤師は、地域医療の担い手として医療と介護の体制を整備するための地域包括ケアシステムの一員として、積極的な取り組みが求められています。又、在宅医療の進展や病院薬剤師の病棟業務における役割の拡大など、チーム医療の一員として他の医療職との連携が大切となっています。

社会的に健康に対する関心が高まる中、予防や健康管理に関する新たな仕組みづくりとして、薬局を地域に密着した健康情報の拠点として活用し、一般用医薬品の適切な使用についての助言や健康に関する相談や情報提供を行うなど、セルフメディケーション推進のための薬局・薬剤師の役割が期待されています。

社会から求められる薬剤師の責務や役割が変化する中、四国の全薬学部連携・共同による薬学教育改革への取り組みが、近未来の医療に対応できる課題発見能力及び、高度な問題解決能力を有する薬学系医療人の養成に大きな成果を上げる事を期待しています。

ステークホルダーの紹介

「四国の全薬学部連携・共同による薬学教育改革」の共同実施に関して協定書を締結しているステークホルダー

TOKUSHIMA

- ・徳島県薬剤師会
- ・徳島県病院薬剤師会
- ・徳島大学病院
- ・徳島赤十字病院
- ・徳島県教育委員会
- ・NPO 法人・山の薬剤師たち

KAGAWA

- ・香川県薬剤師会
- ・香川県病院薬剤師会
- ・香川大学医学部附属病院
- ・香川県教育委員会
- ・NPO 法人・へき地とあゆむ薬剤師

EHIME

- ・愛媛県薬剤師会
- ・愛媛県病院薬剤師会
- ・愛媛大学医学部附属病院
- ・愛媛県教育委員会

KOCHI

- ・高知県薬剤師会
- ・高知県病院薬剤師会
- ・高知大学医学部附属病院
- ・高知県教育委員会



皮下注射要略

森鼻宗次著（1873年、明治6年）
株式会社大塚製薬工場蔵

森鼻宗次（1848-1918）は大阪医学校に入り、後に大阪府病院に勤務した。日本で皮下注射をはじめて実施した医者であると言われており、本書はこの頃の著書で皮下注射の効用と注意を述べたものである。

趣旨・目的

本取り組みは、四国の全薬学部が戦略的連携関係を持ち、薬剤師養成教育・大学院教育と研究を共同して推進し、臨床薬学分野の研究者や高度な専門知識を有する臨床薬剤師を養成することを目指します。

現在、薬学の教育と研究は大きい転換期を迎えています。2010年4月30日に出された厚労省医政局長通知「医療スタッフの協働・連携によるチーム医療の推進について」は、薬剤師に調剤業務だけでなく、患者の副作用の発現状況の把握、有効性の確認やそれに基づく服薬指導等の薬学的管理を求めています。このような新しい業務を担うことのできる薬剤師を養成する教育が薬学部には求められています。また、2009年3月23日に発表された文部科学省「薬学系人材養成の在り方に関する検討会」第一次報告は、新しい大学院博士課程（4年制）で対象とすべき研究領域として、薬剤疫学、薬物のトランスレーショナルリサーチ、レギュラトリーサイエンス、医療安全、医療経済、薬物動態、薬物の有効性や有害事象の発現機序、個々の患者に最適な薬物療法等を例示しています。これらの多くは、薬学の研究者人口がきわめて少ない分野です。さらに、2011年8月19日に発表された日本学術会議薬学委員会提言「国民の健康増進を支える薬学研究—レギュラトリーサイエンスを基盤とした医薬品・医療機器の探索・開発・市販後研究の高度化を目指して—」においても、同様の趣旨が述べられています。

以上は、薬学に特有の課題ですが、2012年8月28日に提出された中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」では、大学全体として、学生の能動的学修支援や適切な成果の評価等、大学教育の大変革を提言しています。

教育と研究に関するこのように大きい改革は、1つの薬学部で努力するよりも4薬学部が連携・共同して実施することにより、速やかに高いレベルに到達できますし、成果を共有することによって、4薬学部の多数の学生が恩恵を受けることができ、さらに、地域社会との連携も実のあるものにすることが可能となります。

本取り組みは、薬学教育の改革（学士及び大学院教育）と地域との連携を真の意味で追究します。

概要

◆平成24年度「大学間連携共同教育推進事業」選定取り組み

【取り組み名称】 四国の全薬学部の連携・共同による薬学教育改革

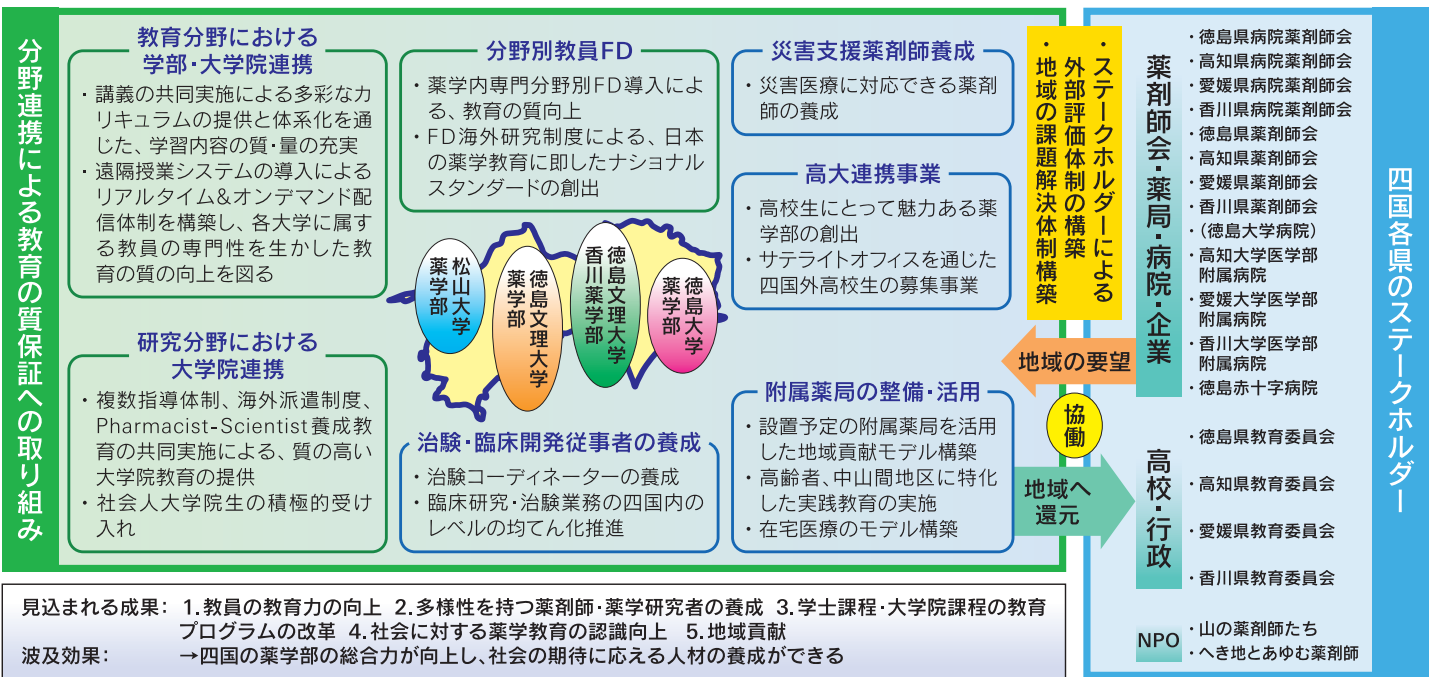
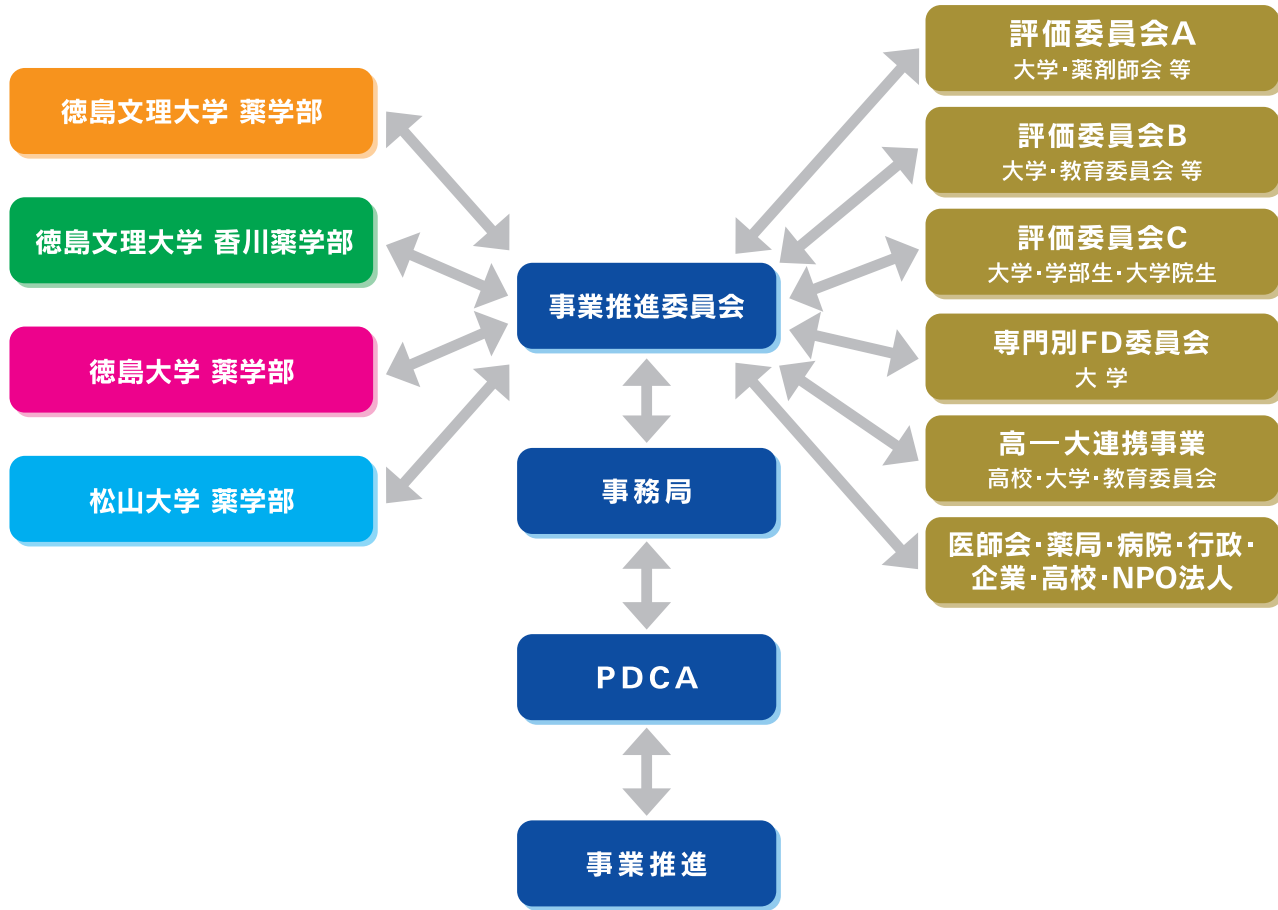
【取り組み大学】 徳島文理大学（代表校）、徳島大学、松山大学

【取り組み概要】 本取り組みは、四国の1国立・2私立大学の4薬学部が戦略的連携関係を持ち、薬剤師養成教育・大学院教育と研究を共同して推進し、臨床薬学分野の研究者（Pharmacist-Scientist）や高度な専門知識を有する臨床薬剤師、災害支援薬剤師の養成を目指す。さらには地域のステークホルダーと密接に情報交換を行い、四国特有の課題に対応できる地域薬剤師の養成に協働して取り組む。

背景&問題点

薬学教育6年制の導入により薬学教育範囲は拡大したが、教育内容に見合った体制は追いついていない。質の高い薬剤師、および優れた薬学研究者の需要はかつて無いほど高まっており、大学に寄せられる期待は大である。

事業実施体制



事業計画

◆全体の事業計画

- 1 教育分野における大学間連携による学部・大学院講義の共同実施（特に、薬剤疫学・医療統計学・レギュラトリーサイエンス・トランスレーショナルリサーチ分野の共同授業の充実）。
- 2 教育の質向上とナショナルスタンダードの確立に向けたための教職員FDの共同実施。
- 3 大学—地域間連携による臨床研究や治験への参画、地域病院・薬局からの社会人大学院生の受け入れ。
- 4 薬学部附属薬局の連携活用を通じた地域薬剤師の技能均てん化への取り組みおよび地域薬局の在るべき姿の探究と先駆的取り組み。
- 5 高大連携を通じた薬学知識の普及・啓蒙と高校生発掘事業の共同開催。
- 6 研究分野における大学間連携による、施設・機器の共同利用体制の構築、共同研究発表会の開催、教員・学生・院生の相互交流。
- 7 自治体との連携が重要な災害支援薬剤師の養成をめざす。さらに、これらの取り組みに関してステークホルダーである地域の医療系団体（県病院薬剤師会、県薬剤師会）、自治体（薬務課、教育委員会）、NPO、企業等の積極的な関与（外部評価者としての評価・提言）を求め、取り組みの質保証を担保する仕組みを整える。



トチバニンジン

（文：橋本敏弘教授）

日本各地に自生する多年草であり、根茎をチクセツニンジンと呼ぶ。サポニンを多く含み、鎮咳去痰作用、健胃作用、解熱作用等を有する。江戸時代より人參の代用として用いられてきた。

◆平成 26 年度の事業計画

平成 25 年度に新モデルコアカリキュラムに対応したカリキュラム改革について、合同教務委員会による議論及び共同 FD を実施した。本年度はその成果に立って、アクティブラーニングの推進、スパイラル型カリキュラムの具体化を重点項目として、共同 FD を深化させる。4 薬学部間ネットワークとリアルタイム・オンデマンド遠隔授業システムの整備が完成したので、学士課程及び大学院の共同授業を推進する。高大連携のためのイベントや研究会を一層推進し、高等学校の教員との話し合いの場を拡大・深化させる。医療情報の IT 化、および、副作用診断教育プログラムのコンテンツ増強と四国全県への普及活動を一層推進する。オーストラリアの薬学高等教育の現状視察を行う。評価委員会を開催し事業の評価を行う。

- 1 4 薬学部共同教育教務委員会を開催。
- 2 専門分野別共同 FD を実施。
- 3 遠隔授業システムを活用した共同授業の実施。
- 4 国内および国外の優れた薬学教育の視察。
- 5 教員の海外での FD あるいは院生の短期海外留学。海外からの講師による講演会の開催。
- 6 ステークホルダーとの協議会開催。
- 7 評価委員会の開催。
- 8 副作用診断教育プログラムのコンテンツ増強と 1 講座開講。同プログラムとかがわ医薬連携情報共有システム (K-CHOPS) の四国全県への普及・啓発活動。
- 9 薬剤師および薬学生を対象としたフィジカルアセスメント講習会の開催。
- 10 へき地医療対応薬剤師養成。
- 11 ニュースレターの発行。



事業成果報告

◆平成 25 年度事業実績一覧 (平成 25 年 4 月～平成 26 年 3 月)

1. ニュースレター第 2 号発行…………… 7 月
2. 専門分野別 FD 研修会開催…………… 10 月～ 2 月
 - ・ 衛生系部会 (徳島)
 - ・ 薬剤学系部会 (高松)
 - ・ 法規制度倫理部会 (松山)
 - ・ 実務系部会 (松山)
 - ・ 薬理系部会 (徳島)
 - ・ 病態・薬物治療部会 (松山)
 - ・ 物理・化学・生物系部会 (松山)
3. 4 薬学部合同教務委員会 (松山) …………… 10 月
4. 国内外の薬学高等教育の現状視察
 - ・ イギリス、フランスの薬学教育視察…………… 6 月
 - ・ 国内の大学附属薬局視察
 - 岐阜薬科大学附属薬局…………… 1 月
 - 金沢大学附属薬局…………… 3 月
5. 国際シンポジウム (主催 徳島大学薬学部、共催 大学間連携共同推進事業) …………… 1 月
地域からはじまる創薬と薬学教育
—生薬と生物多様性、そして地域医療への展開—
6. 4 薬学部の遠隔講義システムの設置…………… 9 月
松山大学薬学部の設置完了…………… 9 月
4 薬学部の設置完了
7. 遠隔講義システムを用いての 4 薬学部共同の授業、講演会等
 - ・ 4 薬学部合同 FD 研修…………… 9 月
医療人養成教育—医学教育からのヒント
藤崎和彦 岐阜大学医学教育開発研究センター教授
 - ・ 4 薬学部合同 FD 研修…………… 11 月
昭和大学における医療人養成を目標とした薬学教育改善
中村明弘 昭和大学薬学部薬剤学教室教授
 - ・ 4 薬学部合同卒業教育…………… 11 月
 - ・ 4 薬学部共同授業…………… 2 月
米国ノースカロライナ大学薬学部における症例検討授業
8. 高一大連携事業
高校生オープン学会 (松山) …………… 10 月
オープンキャンパス: 4 薬学部で 18 回開催…………… 5 月～ 10 月
出前授業: 4 薬学部で 51 回開催…………… 5 月～ 3 月
9. 副作用診断教育プログラムのコンテンツ増強と同プログラム並びに香川医薬患連携情報共有システム (K-CHOPS) の四国全県への普及活動
副作用診断教育プログラムのコンテンツ増強…………… 4 月～ 3 月
G 講座開講…………… 7 月
H 講座開講…………… 12 月
第 2 回 医薬患連携情報共有研究会 (松山) …………… 10 月
10. 評価委員会開催
評価委員会 C 開催 (高松)…………… 8 月
評価委員会 AB 開催 (高松)…………… 2 月
11. 大学間連携共同教育推進事業選定取組全国シンポジウム (東京) …………… 2 月
12. へき地医療対応薬剤師養成…………… 4 月～ 3 月
徳島県美馬市木屋平の木屋平薬局との連携事業
香川県さぬき市多和地区の多和薬局との連携事業…………… 4 月～ 3 月
13. 地域社会との連携事業
公開講座: 4 薬学部で 83 回開催…………… 4 月～ 2 月

◆平成 25 年度 評価委員会 (AB 合同) 議事録

開催日時

平成 26 年 2 月 17 日(月) 14:00 - 16:15

場 所

アルファあなぶきホール (香川県県民ホール)

出席者

学内評価委員

桐野 豊	徳島文理大学 学長
福山 愛保	徳島文理大学薬学部 薬学部長
丸山 徳見	徳島文理大学香川薬学部 薬学部長
香川 征	徳島大学 学長
大高 章	徳島大学薬学部 薬学部長
山田 富秋	松山大学 副学長 (村上学長代理)
松岡 一郎	松山大学薬学部 薬学部長

外部評価委員 A (大学、病院、薬剤師関係者など)

元木 宏	徳島県薬剤師会 会長
川添 和義	徳島大学病院薬剤部 副部長 (安井病院長代理)
水口 和生	徳島県病院薬剤師会 会長
瀬川 正昭	NPO 法人・山の薬剤師たち 理事長
西森 康夫	高知県薬剤師会 会長
宮村 充彦	高知県病院薬剤師会 会長
宮内 芳郎	愛媛県薬剤師会 会長
岡部 泰男	愛媛県病院薬剤師会 副会長 (荒木会長代理)
辻上 巖	香川県薬剤師会 会長
芳地 一	香川県病院薬剤師会 会長
安西 英明	NPO 法人・へき地と歩む薬剤師 理事長

外部評価委員 B (教育関係者、卒業生など)

田上 幸志	徳島県教育委員会学校政策課 主幹 (佐野教育長代理)
松本 弘司	香川県教育委員会高校教育課 主任指導主事 (細松教育長代理)

藤中 雄輔 高知県教育委員会高等学校 課長
(中澤教育長代理)

鈴江 朋子 徳島赤十字病院 薬剤部長
(徳島文理大学薬学部卒業生)

オブザーバー (事業推進委員)

京谷庄二郎	徳島文理大学薬学部 教授
宮澤 宏	徳島文理大学香川薬学部 教授
土屋浩一郎	徳島大学薬学部 教授

議事内容

司会：事業事務局長 堤一彦

1. 評価委員の自己紹介

2. 議長選出

事務局から香川県薬剤師会の辻上巖会長を議長に推薦。承認される。

辻上巖議長の司会で議事進行

3. 事業代表あいさつ：徳島文理大学 桐野豊学長

本事業は平成 24 年度から始まった 5 年間の事業であるが、薬学教育に特化した事業は他にはない。来年度は中間の 3 年目に入る。本日は本事業に対する先生方の忌憚のない意見をお願いしたい。

4. ステークホルダー代表挨拶：香川県薬剤師会 辻上巖会長

本事業の目的が、薬剤師、教育委員会が中心となって薬学教育をより良い方向に持って行くという事は現場の薬剤師にとってありがたい事である。薬学部も 6 年制になって臨床薬学を学んでいるが、新人の薬剤師をみているとまだまだ薬剤師の仕事は調剤であると思っっているように見える。本事業を通じて患者の薬物治療を考えられる薬剤師を育てて欲しい。また、国民や県民の目に見える薬剤師業務を鍛えて欲しい。

5. 平成 25 年度事業成果報告および来年度方針：

事業代表 徳島文理大学 桐野豊学長

ニュースレター 2 号を用いて事業全般を説明した。本年度は 7 項目を計画し、実施した。① 4 薬学部共同教務委員会および専門別 7 分野 4 薬学部共同 FD の実施、② 遠隔講義が可能な施設・設備の整備。今年はこのシステムが完成したので来年度から積極的に活用する。③ 国内外の薬学教育の視察。日本の薬学と世界の薬学教育の違いを知るため、今年には英仏の大学を視察した。④ 高大連携活動の実践。昨年度の評価委員会の時に教育委員会からの要望に基づいて、高校生のためのオープンキャンパスおよび出前授業を数多く行った。これからも教育委員会からの意見を聞きながら高大連携事業を行う。⑤ 副作用診断プログラムのコンテンツ増強と K-CHOPS の四国全県への普及。副作用診断プログラムは生涯教育の一環として行っており、K-CHOPS は香川で行っていたが、本事業では四国全県での普及を目指している。⑥ 評価委員会の開催。評価委員会は A、B、C の 3 委員会があるが、評価委員会 C は大学院生、学部の高学年を対象に行っている。研究発表を中心に行っているが、合宿形式とし学生、教員が研究や薬学教育について気楽に語る事ができる場を提供している。⑦ ニュースレターの発行。今年の計画の 7 項目の活動は全て完了した。

来年度の事業計画として、ステークホルダーとの連携を深めたい。今年には薬剤師を対象にした公開講座を 84 回行ったが、来年はこのような公開講座を個々で実施するのではなく組織的に行いたい。実務の場での薬学教育について、近未来に期待される薬剤師を育てるために大学の附属薬局が必要である。来年度は附属薬局設立のため、薬剤師会、病院薬剤師会と話し合いを行う。3 大学の大学院と（独）医薬品医療機器総合機構（PMDA）とが連携した連合大学院を考える。

6. 個別成果報告

- 4 薬学部共同教務委員会、専門分野別共同 FD 研修：松山大学薬学部 松岡一郎学部長

4 薬学部共同教務委員会（平成 25 年 10 月 27 日、松山大学）ではモデル・コアカリキュラムについて話し合った。

改訂の基本方針

現在の「薬学教育モデル・コアカリキュラム」及び「実務実習モデル・コアカリキュラム」の二つを関連づけて 1 つのモデル・コアカリキュラムとして作成する。

薬剤師として求められる資質を明確にし、その資質を身につけるために学ぶという形に変更する。

改訂のポイント

医療人である「薬剤師として求められる基本的な資質－10 項目」を設定。

- ① 薬剤師としての心構え
- ② 患者・生活者本来の視点
- ③ コミュニケーション能力
- ④ チーム医療への参画
- ⑤ 基礎的な科学力
- ⑥ 薬物療法における実践的能力
- ⑦ 地域医療における実践的能力
- ⑧ 研究能力
- ⑨ 自己研鑽
- ⑩ 教育能力

「基本的な資質」を前提とした学習成果基盤型教育 (outcome-based education) に力点を置く。

コアカリキュラムの大項目：

- A. 基本事項
- B. 薬学と社会
- C. 薬学基礎
- D. 衛生薬学
- E. 医療薬学
- F. 薬学臨床
- G. 薬学研究

7 専門分野別 FD (Faculty Development) 研修会を開催した。

共通議題：「改訂コアカリキュラムに対する連携各学部の取組と問題点」

- 遠隔講義システム：徳島大学薬学部 土屋浩一郎教授

本システムは本事業に参画している 3 大学 4 薬

学部がリアルタイムまたはオンデマンドで相互に授業を配信するシステムで、3大学の学生・大学院生の学ぶ機会の拡充を目指している。平成25年度は、以下のスケジュールで遠隔講義システムの運用を行った。

- ① FD 合同研修会、主催：松山大学、平成25年9月25日16時～、医療人養成教育—医学教育からのヒント（岐阜大学医学教育開発研究センター教授 藤崎和彦先生）
- ② FD 合同研修会、主催：松山大学、平成25年11月7日16時～、昭和大学における医療人養成を目標とした薬学教育改善の試み（昭和大学薬学部教授 中村明弘先生）
- ③ 合同卒業後教育講座、主催：徳島文理大学薬学部、平成25年11月10日14時～17時30分、第30回徳島文理大学薬学部卒業後教育講座（岡山大学病院教授 千堂年昭先生、日本薬剤師会副会長 生出泉太郎先生、徳島赤十字病院 日浅芳一先生）
- ④ 薬理学FD、主催：徳島大学薬学部、平成25年11月27日10時～11時30分
- ⑤ 国際シンポジウム、主催：徳島大学薬学部、平成26年1月12日
- ⑥ 講演会、主催：徳島文理大学薬学部、平成26年2月14日16時30分～17時30分、英国に学ぶ薬剤師のための大学院：未来の薬剤師の発展のために（University College London, School of Pharmacy 博士課程大学院生 荒川直子先生）
- ⑦ ビデオ講習会、主催：徳島文理大学薬学部、平成26年2月16日9時～15時40分、「認定実務実習指導薬剤師」養成ビデオ講習会

③の配信終了後に参加者に対しアンケートを行ったが、ほぼ全員から、本システムの有用性について高い評価が得られた。

さらに平成25年度は、徳島大学薬学部ホームページ上に『オンデマンド配信システム』のホームページを開設し、運用を開始した。このシステムで

は、本事業に参加している3大学4薬学部の学生、院生、教員、のべ3000人が個々のID・パスワードを使ってログインし、視聴することが可能となった。また、視聴の履歴も管理することで、出席管理等に利用することができる。

●英仏薬学教育視察：徳島文理大学香川薬学部 宮澤宏教授

2013年6月5日～14日にかけて、英国の王立薬剤師会（Royal Pharmaceutical Society, RPS）、キングズ・カレッジ・ロンドン（King's College London）、ユニバシティ・カレッジ・ロンドン（University College London）、続いて仏国に移動してレンヌ第1大学（Université de Rennes 1）、パリ第5大学（Université Paris Descartes）、パリ市内の薬局2軒（Catherine LELONG-LECUYER、PHARMACIE DE L'EUROPE）を視察した。両国は薬学先進地域であり、薬学教育年限は英国は5年、仏国は6年あるいは9年となっている。これらの国における教育システムや薬剤師の地位について実情を見聞した。

ヨーロッパでは薬剤師が医師や歯科医師、看護師等と全く対等で、高い社会的地位を確立しており、世間も（もちろん教育機関も）それを共有しており、尊敬と信頼を勝ち得ていることを実感した。訪問した4つの大学では皆研究と臨床が一体化しており、お互いに交流が盛んで境界がなく、互いの訪問を歓迎し開放的で、狭小な考えがないように感じた。どの部署でも誰もが意欲的で、親切で前向きで、とにかく患者の健康を守ることが一番大切で、それが自分たちの社会の目標であるという意識が大きく現れていた。医療教育の基本が徹底しているという印象であった。

日本では薬剤師が多いことに驚いていたが、両国とも高齢者人口の増加については極めて関心が高く、日本の動きを注意深く見ている。サービス構成の変化、ケアの経路、サービス環境など、新たな課題も認識されている。薬剤師は開業医とコンタクトしなければならないし、それが適切に実行

でき、質が高くなければならないので、教育の中でどのように実践するかは今後も課題である。医師や薬剤師の数をどのようにコントロールして行くか、仕事ベースの学習を通してスキルを得るのをサポートするのが教育であり、経験中心の能力を高めて行く方法論についても常に改革を志すべきであると力説されていたのが印象的であった。

今回は丁度学期が終わった直後で、学生達の話はあまり聞けなかったが、垣間見た学生達は生き生きしており、薬学部 of 学生達の質の高さも感じられた。

●附属薬局視察：徳島文理大学薬学部 京谷庄二郎教授

大阪薬科大学、慶応義塾大学、北海道薬科大学の附属薬局は既に視察しているが、本年度は岐阜薬科大学附属薬局（国立大学病院の門前）を平成26年1月30日に訪問した。年度内に金沢大学の附属薬局も訪問予定である。

<特徴><附属薬局設置の経緯>

岐阜薬科大学附属薬局は1998年に全国で初めての大学附属の薬局として開設され、2004年、岐阜大学病院の移転に伴い、附属薬局も現在の地（岐阜大学医学部附属病院に隣接）に新築移転された。

<経営組織>

開設者は岐阜市長

<職員>

薬剤師は常勤6名で全員大学の教員（助手、助教、講師）、事務員2名である。

<教育への活用の状況>

附属薬局は、日常の薬剤師業務を通じて6年制薬学教育課程の長期実務実習をはじめとする学部学生の早期体験実習、臨床系実習、卒業研究、および大学院学生の研究テーマ発掘などに利用されている。薬学部5年生を対象とした長期実務実習は、年間に30名の学生が附属薬局で実習を行っている。

薬剤師生涯学習支援講座、近隣薬局との合同勉強会も開催し、地域医療に貢献できるよう努めている。

附属薬局を活用した臨床教育の一環として、薬局内に「育薬教育センター」を設置している。

●高大連携活動：徳島文理大学香川薬学部 丸山徳見薬学部長

高校生に薬学部を知って貰うためのオープンキャンパスを4薬学部で18回開催し、1059名が参加した。オープンキャンパスでは調剤体験、模擬授業、研究体験も実施している。出前授業、出前実験は4薬学部で51回実施している。内容は研究色の強いものから薬物乱用防止まで幅広く行っている。今後もこのような事業を4薬学部が共同して充実させてゆく。日本薬学会中四国支部学術大会が松山大学で開催され、その中で高校生のための研究発表会である高校生オープン学会も開催された。ポスター発表が17演題、口頭発表が9演題発表された。優秀な演題は表彰された。開催場所が松山にもかかわらず、高知、香川の高校生も参加した。本事業は今後も高校生のための研究を支援してゆく。

●副作用診断教育プログラム・K-CHOPS 普及活動：徳島文理大学 桐野豊学長

米国では医原病として入院患者の22万5千人が死亡している。外来患者を含めるとその倍の人数が死亡している。その中で、薬の副作用で約10万人が死亡している。医原病は死因の第三位である。日本でも同様の傾向であるとの報告がある。副作用の早期発見と早期対応のための副作用診断教育プログラム、e-ラーニングの事業は徳島文理大学の香川薬学が香川県を対象に5年前から実施しているが、現在は本事業に載せて四国全県への展開を図っている。1コース5講義で構成されており、全講義が終了すると日本薬剤師研修センターから受講シールを貰える。K-CHOPSは医薬品の適切な使用情報を薬剤師に提供するためのシステムである。医師から病名、検査データ、処方箋、薬剤師からは調剤情報、患者からは服薬情報が

揃って適切は薬物療法が可能になる。これら情報を統合するシステムとして K-CHOPS を開発したが実用化には至っていない。医師、薬剤師間で理解を深めるために医薬患連携情報共有研究会を設立した。複数の薬局から複数の薬を貰っている患者の服薬情報を知る事は副作用防止の観点から非常に重要である。情報をサーバーに上げる事により、個人情報の漏えいなどリスクもあるがそれ以上にこれらのシステムを構築する事も重要である。

●評価委員会C：徳島大学薬学部 土屋浩一郎教授
平成25年度評価委員会Cは、平成25年8月9,10日の2日間にわたり、徳島文理大学香川薬学部にて本事業に参加している3大学4薬学部の学生、院生、教職員が参加し開催した。まず、各大学の大学院カリキュラムの説明、およびそれらに対する学生の要望というタイトルで、徳島文理大学大学院薬学研究科と徳島大学大学院薬科学教育部の現状を担当者が発表し、質疑応答を行った。

次いで、海外の薬学高等教育の状況について発表が行われた。松山大学薬学部から北欧（フィンランド、デンマーク）の事情について、徳島大学薬学部から米国薬学高等教育の状況を紹介した。さらに、徳島文理大学よりイギリス、フランスの状況について紹介があった。印象としては、日本は米国流の制度を導入しているが、欧州では国によって多少制度が異なるほか、腰を据えた教育が行われているように感じられた。

さらに、『企業が求める人材とは』という演題で、大塚製薬株式会社 人事部（研究担当）の方の特別講演を開催し、製薬業界を取り巻く日本・世界の状況について解説があった。

この後、参加している学生・院生による研究発表を行い、活発な質疑応答が行われた。

2日目も引き続き研究発表を行い、最後に総合討論を行って2日間の日程を終了した。終了に先立って参加者に対しアンケートを行い、その効果



桐野豊事業代表



辻上巖議長



評価委員会（AB 合同）

についても検証したが、アンケートの結果も踏まえ、更に改善を図って参加者および本取組に対して有益なものになるように改善を図っていきたい。

7. まとめ：辻上巖議長

本日の発表内容に基づき、議長名で本事業の代表である桐野学長に評価委員会からの提言書を文書で提出します。

8. 閉会のあいさつ：事業代表 徳島文理大学 桐野豊学長

本日はありがとうございました。質問がありましたら担当の教員までメールあるいは電話をして頂

ければと思います。また、来年度以降、これをして欲しいとの意見がございましたら辻上会長にご連絡下さい。本日はありがとうございました。

以上

平成 26 年 2 月 20 日

文部科学省 大学間連携共同教育推進事業
四国の全薬学部の連携・共同による薬学教育改革
事業代表 徳島文理大学学長 桐野 豊殿

香川県薬剤師会会長
評価委員会議長
辻上 巖



提言書

H26 年 2 月 17 日に、香川県民ホールにおいて、17 名の評価委員と 6 名の評価委員代理が出席し、評価委員会（AB 合同）が開催された。事業代表の徳島文理大学 桐野学長から H25 年度の事業成果と来年度の方針の報告があった。また、事業担当者から個別の成果報告があった。報告を受けて以下の事を提言する。

「四国の全薬学部の連携・共同による薬学教育改革」事業は H24 年度から始まった事業であり、本年度は 2 年目に当たる。本事業は薬学教育改革に特化した事業であり、他に例を見ない。また、薬学関係者だけではなく、4 県の教育関係者も含めて薬学教育改革を進めているところに本事業の特徴がある。四国は、高齢化率が高い地域であり、過疎地域も多くある。また、今後、東南海地震も予想される地域でもある。四国の薬学部においては、各大学の力を結集し、高齢者医療、へき地医療、災害対応医療や在宅医療の推進など、地域における先導的な役割を果たす実践的な薬学教育のモデルを構築し、地域に貢献する質の高い薬剤師を養成することが望まれてきた。以上の課題を解決するため、患者の立場に立ち個々の患者の状況に適切に対応できる臨床薬剤師の育成、そして地域に密着した薬剤師を育成する事を本事業に期待する。四国の 4 薬学部が連携して学部・大学院教育改革を実施することは、地域医療からの要望に応えた薬剤師の養成や現職薬剤師の質的な向上に大きく寄与する事になる。また、高校生に薬学を知って貰うための高大連携事業は薬剤師不足を解消する力にもなる。遠隔講義システムの活用は大学での教育だけではなく、現職薬剤師の質向上に繋がる有効な手段であり、大いに活用して頂きたい。この取組を通じて、3 大学 4 薬学部を卒業した薬学部生が四国のみならず我が国の保健・医療・福祉の向上に大きく貢献することを期待する。評価委員会としても、積極的に地域の要望を事業関係者に伝えるとともに、4 薬学部と連携協力して事業成果を地域に還元して行きたいと考えている。

◆大学間連携遠隔講義システムについて



徳島大学薬学部 教授 土屋浩一郎

本取組は、四国の全薬学部が、薬剤師養成教育・大学院教育と研究を共同して推進し、臨床薬学分野の研究者や高度な専門知識を有する臨床薬剤師を養成することを目指している。

各大学では定期的に外部講師を招聘し講演会を開催し、また、アドバンスト科目のような、他大学にはない特色のある講義を開講しているが、お互いの大学を行き来してそれらの講演会・講義に参加することは地理的条件によりこれまで困難であった。

そこで本システムは、この事業に参画している3大学4薬学部がリアルタイムまたはオンデマンドで相互に授業および講演会を配信することにより、3大学の学生・大学院生の学ぶ機会の拡充を目指したものである。

本システムを構築するため、各大学にビデオ会議システムを設置し、また、徳島大学薬学部にはさらに、各大学で収録した画像データを収集・保存・管理する24時間稼働型のサーバー（多地点接続サーバー、収録配信用装置）と、セキュリティー保持のためのゲートキーパー装置、また停電時に対応した電源装置を設置し、各大学で収録された講義内容を保存し、学部学生、大学院生や教員がリアルタイムおよびオンデマンドで視聴できるシステムの構築を行った。

また、本システムによるオンデマンド配信を授業で用いるには出席管理システムの導入が不可欠であったことから、徳島大学薬学部には3大学4薬学部のべ3000人の学生・院生の視聴状況視聴の履歴（ログイン時間、ログオフ時間、視聴コンテンツ番号、視聴者名）を管理できるシステム構築も合わせて行った。

本システムは平成25年9月から試験運用を開始し

ているが（表1）、運用当初は設置器機の設定トラブル（ファイアーウォールの設定、録画時間の上限設定、添付ファイル送信機能設定）により、リアルタイム視聴時にサテライト会場で時々画像・音声途切れる事が発生し、本システムを利用して講演会等に参加していただいた関係者にご迷惑をおかけした。しかしこれらトラブルも回を追う毎に減少し、現在は安定して視聴が行えるようになっている。

表1 大学間連携遠隔講義システムを使った講習会、講演会等

- | |
|---|
| 1. 4薬学部合同FD研修 平成25年9月25日(水)
主会場：松山大学 |
| 2. 4薬学部合同FD研修 平成25年11月7日(木)
主会場：松山大学 |
| 3. 合同卒業教育 平成25年11月10日(日)
主会場：徳島文理大学 |
| 4. 4薬学部合同授業 平成26年2月3日(月)
米国ノースカロライナ大学薬学部における症例検討授業
主会場：徳島大学 |
| 5. 講演会 平成26年2月14日(金)
英国に学ぶ薬剤師のための大学院：未来の薬剤師の発展のために
主会場：徳島文理大学 |
| 6. 「認定実務実習指導薬剤師」養成ビデオ講習会
平成26年2月16日(日)
主会場：徳島文理大学 |
| 7. チーム基盤型学習 (Team-Based Learning: TBL) の体験講習会
平成26年2月27日(木)
主会場：徳島文理大学香川薬学部 |
| 8. 合同卒業教育 平成26年5月25日(日)
主会場：徳島文理大学 |

本システムにおけるリアルタイム配信ではサテライト会場から演者への質疑応答も可能であること、また、サテライト会場に設置したスクリーンには撮影会場と同じスライドが投影されることもあり、参加者からも好評である。

現在は一般の講演会のほか、認定実務実習指導薬剤師養成ビデオ講習会にもその利用を広げ、学生・院生のみならず薬剤師の先生方にも利用していただいている。

一方、このリアルタイム配信に加え、登録された方が何時でも自身のパソコンからコンテンツを視聴できるオンデマンド配信のシステム構築もほぼ完成したので概要を紹介したい（図1）。

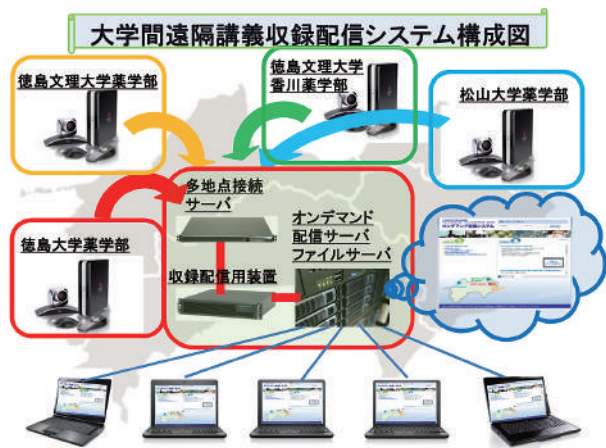


図1 オンデマンド配信システム構成図

まず、徳島大学薬学部ホームページ（<http://www.tokushima-u.ac.jp/ph/>）トップ画面の、「オンデマンド配信システム」の部分をクリックすることで、オンデマンド配信システムのホームページ（図2）へ移動する。

この画面右上に、視聴者があらかじめ配布されたIDとパスワードを入力すると、「教材カテゴリ」の中から視聴したいタイトルを選ぶことができ、画面上に収録した画像および音声の流れ、視聴が開始される（図3）。

その際、カメラで撮影したビデオ映像だけでなく、講師の方が実際に映した資料も手元のパソコンの画面上で参照することができる（図4）。



図2 オンデマンド配信システムのホームページ



図3 視聴画面1

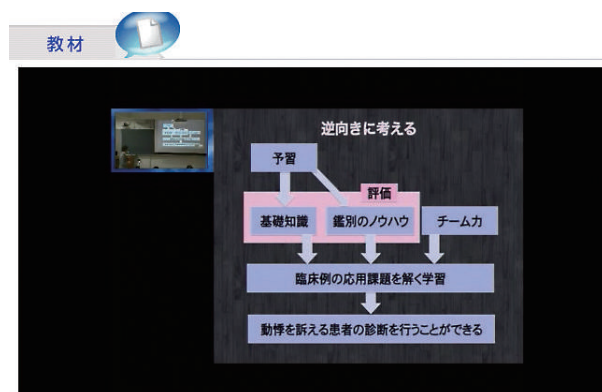


図4 視聴画面2

現在、収録したコンテンツをオンデマンド配信に適した形式に変更する作業とともに、安定な運用に向けて最終の調整を行っている。オンデマンド配信システムのホームページ（図2）では新着教材のリストを掲載しているので、どのようなものか一度ご覧頂ければ幸いです。

地域社会との連携

◆大学間連携によるチーム医療学習カリキュラム

—薬学部・医学部（医学科・看護学科）合同授業—

松山大学薬学部 臨床薬学教育研究センター 柴田 和彦



◇はじめに

近年、社会から、患者を中心とした医療の質と安全性の向上が強く求められるようになってきた。また、医療機関においても、医療の高度化・複雑化に伴う業務の増大に対応する必要性が増している。その結果、多種多様なスタッフが各々の高い専門性を前提として、目的と情報を共有して業務を分担するとともに、互いに連携・補完しあって患者の状況に的確に対応するための「チーム医療」が、さまざま医療現場で実践されるようになってきた。このような流れは、医療系学部の教育においても変革や改善が必要であることを強く示唆している。そこで今回、松山大学薬学部では、愛媛大学医学部と共に多職種連携の重要性を学習するための教育プログラムの開発に取り組み、チーム医療を担う人材の育成における有用性を検証した。

◇実施概要

愛媛大学医学部では、平成 21 年度より、医学科と看護学科での合同授業が実験的に実施されていた。

これをもとにして、松山大学薬学部の医療薬学科 4 年次生全員が参加する 3 学科合同の授業を実施することとした。本授業は、平成 24 年度と平成 25 年度の 2 回開講した。松山大学薬学部 医療薬学科と愛媛大学医学部 医学科・看護学科の学生が将来に向けた良質な医療を提供するために、互いの意見や考えの違いを知り、それらを補い、一致させるために共に学ぶことを目的として授業を行った。

医療薬学科 4 回生、医学科 3 回生、看護学科 4 回生を対象とし、(1)基調講演 (2)グループワーク (3)グループ発表と全体討議を行った。(写真 1～4)

- (1) 基調講演では、DVD で「医療者と患者・家族のより良いコミュニケーションについて」を上映し、愛媛県のがん患者会、「おれんじの会」



写真1 オリエンテーション



写真2 基調講演の風景



写真3 グループワークの風景



写真4 成果発表風景

の代表者が患者にインタビューする形式で、患者・家族はがん治療をどう見ているのか、また、がん告知を受け、治療を続けるうえでの精神的・身体的及び社会的な状況について家族や医療スタッフとのやりとりの様子を交えながら語っていただいた。その様な治療や看護を受けた体験から医療提供者と患者の相互のコミュニケーションの重要性などを講演していただいた。特に、臨床実習前の医学生、薬学生にとっては、がん患者の生の声を聴く貴重な体験の機会となった。

(2) グループワークでは学生を3学科混成の25～26グループに分け、「患者さんの声を聞いて、それぞれの学科の学生としてどう思うか？ どう考えるか？」について、各々の役割とチームとして果たすべき役割を討論した。各グループに教員がチューターとして参加し、おれんじの会の方々にも適宜、患者としてのコメントをいただいた。

(3) 全体討論は、学生を3クラスに分け、それぞれで討論の内容を発表し、教員やおれんじの会の方々が適宜コメントを加え、クラスで課題を共有した。

学生の成績評価は、グループワークの要約、チーム医療推進の方策、合同授業の感想について提出させ

たレポートで行った。がん患者の生の声を聞いて、医療提供者と患者・家族間に治療を進める中では微妙なすれ違いが起きていることや、それぞれの役割について学生の立場で真剣に考え、現状を受け止め、討論・発表することができていた。平成24年度と平成25年度の3学部合同授業の全体のアンケート調査（回収率：各86.1%、77.1%）の結果から、「最も良かった企画」については、平成24年度はグループワークが多く、平成25年度は基調講演となったが、グループワークと基調講演で全体の90%を占めていた（図1）。「企画についての満足度」については満足以上が90%となり（図2）、「それぞれの役割についての理解度を深める」の項目では理解できた学生が95%とチーム医療の役割について理解を深める機会となった（図3）。

◇成果と展望

今回のアンケートの結果から、「最も良かった企画」として全体の約60%が基調講演を選んでいる。しかし、学科別に関しては、看護学科、医療薬学科は基調講演を選んでいる学生が多いが、医学科は基調講演とグループワークを選んでいる学生が各々40～50%ずつと同じ割合であった。この企画について全体の約90%の学生が①非常に満足 ②満足したと感じていた。特に他学部との係わりがなかった薬学部に関しては非常に満足している学生が30%と3学科の中でも多く見られた。グループワーク

アンケート集計結果(1)

Q. 本日のプログラムで最も良かった企画は何でしたか?

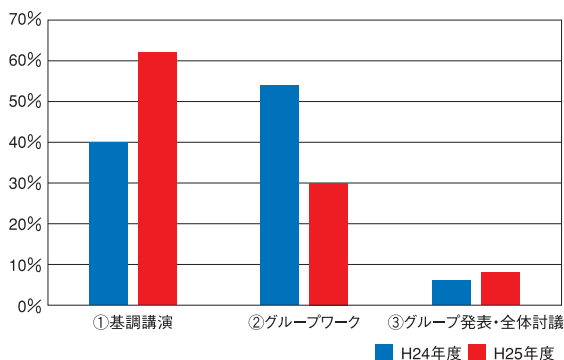


図1

アンケート集計結果(2)

Q. 本日の合同学習を終えて、この企画についてあなたの今の満足度についてお答えください。

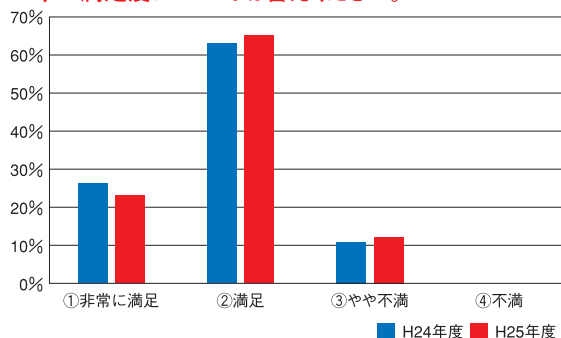


図2

アンケート集計結果(3)

Q. このプログラムを終えて、あなたはチーム医療におけるそれぞれの役割について理解を深めることができましたか?

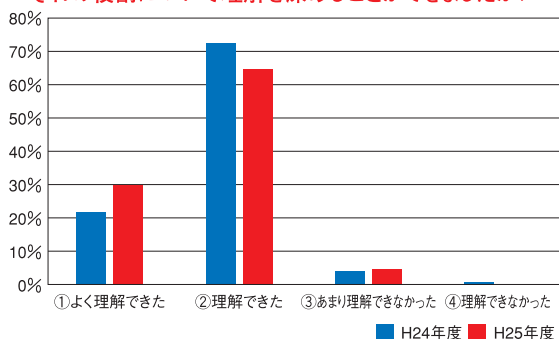


図3

の時間に「互いの考え方やアプローチの違いを実感する」ことができた一方、この時間の短さに対する不満も挙げられていた。「このプログラムを終えて、チーム医療におけるそれぞれの役割について理解を深めることができましたか」の設問に関しては、実習経験がある看護学科の学生は「理解できた割合」が100%であった。医学科・医療薬学科の学生に関しても、「チームワークで他職種を理解することが自分の役割を明確化した。」といった意見が多数あり、約90%の学生は理解できたと実感していた。残り1割の学生は「あまり理解できなかった」と答えていた。しかし、「もう一度話し合いたいと思った。」「時間が足りずに、深い内容まで議論できなかった。」「何をすべきか今後考えていきたい。」など、さらに学びたいという思いも見られ、今後の学習意欲の向上にむけて良い結果が出ていることが明らかとなった。

今回の3つの学科の合同授業により、それぞれの学科の学生の意見や考えの違いについて体験することにより、医療人としてチームを作っていく重要性について学習することが可能と思われる。したがって、本授業形態が、チーム医療学習を進めるにあたり、非常に有効であると考えられた。

◆徳島赤十字病院での災害救援活動訓練に参加して



徳島文理大学薬学部 教授 山川 和宣

本学薬学部では授業の一環として災害ボランティア救援活動として徳島赤十字病院が実施している災害訓練に昨年より参加しています。3年前に東日本大震災では徳島赤十字病院はいち早く救援活動に行っており、その病院が行う訓練に参加することは学生にとってはよい機会でもあります。

先の阪神大震災では被災地にたくさんの救援物資が届けられましたが、その中には医薬品が多く含まれていたにも関わらず、それを有効に利用できなかったと聞きます。当時は薬剤師が救援活動に参加するという環境でなかったのが原因で、その時の教訓が後の中越地震、東日本大震災に生かされてきています。特に東日本大震災では多くの薬剤師が救援に参加し、医師、看護師とともにチーム医療の一員として大いに活躍しています。昨年に続いての今回の訓練では薬学生のできる活動は被災者役で手伝い程度ですが、トリアージ訓練など実際に参加して初めて「雰囲気、救援の流れ」など講義などの座学では得られない勉強がたくさんあります。

今回の参加者は1年から4年までの学生22名で、昨年の35名より少なめですが、あくまで自由参加

ということで、強制していませんので関心のある学生ばかりでした。訓練の2日前には徳島赤十字病院の職員が大学に来て事前説明をしましたが、全員が真剣に聞いており訓練への意気込みを感じました。訓練の内容は表にしています。

訓練当日は最初に役に応じて分かれていましたが、最初はムラージュ（受傷部位の化粧）を行い、この段階で気持ちも徐々に被災者になっていきます。訓練時間そのものは2時間程度でしたが、いざ始まると被災者、救急隊、医療スタッフみんなが真剣そのもので訓練とは思えないくらいでした。

瓦礫に挟まれた被災者症状に応じて、黒から黄までの3エリアに患者のトリアージを行いそれぞれの部署に搬送してきばきと処置をこなしていくのはさすがだと感心しました。

訓練終了後は、訓練のアンケートを記入し、栄養課が作った非常食をいただいて解散となりました。学生たちは帰りは少々疲れ気味でしたが、良い経験をしたと感激していました。



ムラージュ（創傷部の化粧）を施しているところ



倒壊した家屋の下敷きになった人々を救急隊員が救済している様子（一次トリアージをしてトリアージタグをつける）



仮設テント内で応急処置をした後、各エリア（赤、緑、黄）へ搬送する



一次トリアージをした患者を救急車で病院に搬送し、医療スタッフが仮設テントへ搬送する



緑エリアでの処置風景、ここで処置を行って終了となるが、時には容体が急変し、急遽赤エリアへの搬送をする患者もいる

◆ 訓練概要

<日時>平成 26 年 6 月 21 日(土) 10 時から 12 時まで

<場所>救急車寄せ、救急外来、複合棟 1 階東エントランス、病院棟 2 階総合案内前フロア、地域交流・国際交流スペース、401 会議室、講義室

<想定災害>平成 26 年 6 月 20 日(金)午前 10 時 00 分頃、高知県東部を震源とする震度 6 強の直下型地震が発生。小松島市を中心に各地で甚大な被害が発生した。市内の被災現場から多数の傷病者が搬送された。津波警報は発令されず。

<時間と行動>

8 : 30

↓ 大学よりバスで移動

9 : 00

↓ 傷病者役に応じての事前説明とムラージュ（化粧）を施行

10 : 00 災害発生、全館放送「地震発生」をアナウンス
↓ 災害対策本部の準備 学生はそれぞれの部署に分かれて待機

10 : 05 ~ 各部署は安否確認と被災状況の把握
被害状況報告 「災害レベル 3」
各エリアの準備
被災者の受け入れ開始
救急隊員による（消防）現場トリアージ後、傷病者搬送
各部門・エリアにて医療救護活動
傷病者の受け入れ（入院、手術）

12 : 00 訓練終了

↓ 訓練の反省会 アンケート記入
災害時調理食の試食

12 : 30

↓ バスで大学まで移動

13 : 00